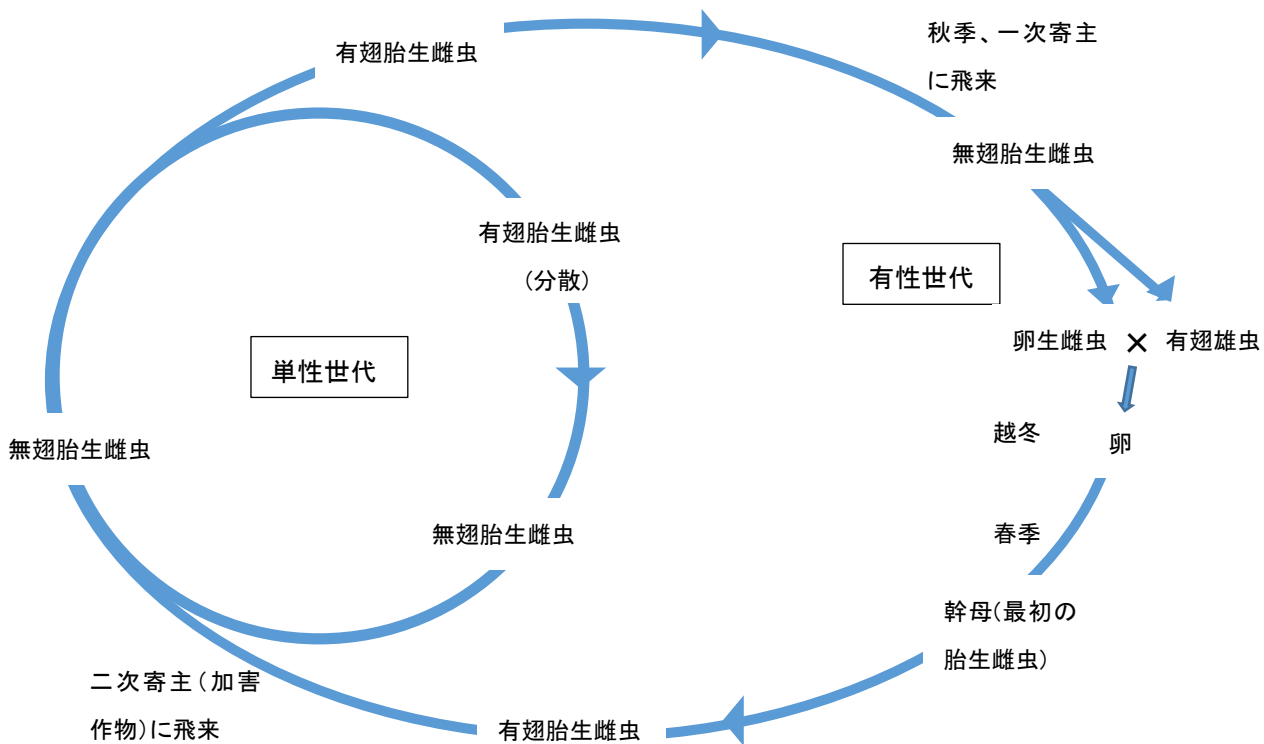


## 野菜・花の害虫(アブラムシ類)

○多くの種は、若い葉や花茎に群がり寄生し、葉を黄変・萎縮させる。また、葉や果実についた排泄物(甘露)はススが発生させ、光合成を阻害し収量が低下、さらには収穫部位がススで汚れ商品価値が下がる。これらの吸汁による直接的加害のほか、各種ウイルス病を媒介するため間接的な被害が発生する。

本県の野菜・花き類では、寄主範囲の広いワタアブラムシ、モモアカアブラムシが問題となることが多い。そのほかに、ジャガイモヒゲナガアブラムシや寄主範囲は狭いがアブラナ科作物に寄生するダイコンアブラムシ、ニセダイコンアブラムシ、マメ類に寄生するマメアブラムシ、ネギ類に寄生するネギアブラムシなど多くの種が確認される。



アブラムシの生活環は複雑で、卵生雌虫、雄虫、胎生雌虫など多数の生活型(モルフ)が出現する。卵生雌虫と雄虫が出現し、卵で越冬する世代を有性(両生)世代、胎生雌虫のまま単為生殖を繰り返す世代を単性(無性)世代と呼び、有性世代と単性世代の両方をもつ生活環を完全生活環、単性世代のみからなる生活環を不完全生活環と呼んでいる。加害の主体となるのは胎生雌虫であり、単為生殖、卵胎生(胎生雌虫から産卵されるときに孵化するため胎生するように見える)で増殖する。また、アブラムシには有翅型と無翅型があり、個体群密度や栄養条件、気象条件などにより分化する。移動力に富む有翅虫の発生がウイルス病の伝搬に重要であり、反対に無翅型や幼虫がウイルス病を伝搬する機会が極めて低い。

### ○ワタアブラムシ *Aphis gossypii* (Glover)

#### (1) 本県での発生状況

キュウリ、ナス、ピーマン、イチゴ、キクなど多くの作物に寄生する。本県では5月頃に有翅虫が出現、梅雨明

け後、急激に増殖し9月末まで様々な作物で寄生が見られる。施設内では周年発生が見られ、イチゴなどでススによる果実の汚れが問題となる。また、新葉を巻いて萎縮させ、その内面に群棲することがある。

## (2) 形態及び生態、被害の様子

ワタアブラムシは多くのバイオタイプ(形態的に区別はできないが、生物学的な特徴が異なる系統)に分かれており、晩秋にムクゲなどに移住する完全生活環をもつもの、暖地などでキクやオオイヌノフグリ等の雑草に無翅胎生雌虫や幼虫態で越冬する不完全生活環のものなどがある。本種は寄主範囲が非常に広いことから、多数の植物ウイルス(特に CMV(キュウリモザイクウイルス)、WMV(カボチャモザイクウイルス)など被害の大きなウイルス)の媒介者である。

有翅胎生雌虫は黒色(図1)、体長約1.7mm程度、無翅胎生雌虫の体長は1.2~1.7mm、黒色に近い暗緑色から緑色、黄色に近い個体も見られる(図2, 3)。有機リン剤、カーバメート剤、合成ピレスロイド剤に対する抵抗性が発達していることが知られている。



図1 ワタアブラムシ有翅虫



図2 ワタアブラムシ無翅成虫



図3(左) ワタアブラムシ黄緑色個体



図4(左下) キュウリ寄生状況



図5(右下) イチゴ葉に発生した甘露によるスス

### (3)防除対策

施設栽培では、施設開口部に1mm 目合い以下の防虫ネットを展張し、施設内への飛来を防ぐ。ただし、訪花昆虫の飛来を妨げるので、受粉が必要な作物ではミツバチ等を放飼する必要がある。露地栽培では、シルバーマルチやシルバーテープの利用により、飛来が抑制できる。

また、施設被覆資材に UV カットフィルムを利用すると、アブラムシ類やアザミウマ類の侵入を抑制できるが、ミツバチの訪花活動に支障をきたし、作物によっては花・果実の着色不良をおこすので注意が必要である。

アブラムシ類は増殖能力が高いため、物理的防除対策を取っていても化学的防除(農薬による防除)が必要になることが多い。近年、宮崎県や大分県のピーマンから、本種のネオニコチノイド系剤に対する抵抗性系統が見ついているため、同系統薬剤の連用はしないなど薬剤選択に注意する必要がある。

### ○モモアカアブラムシ *Myzus persicae* (Sulzer)

#### (1)本県での発生状況

アブラナ科作物、ナス科、ホウレンソウやキュウリなど多くの作物に寄生する。本県では春季にキャベツやブロッコリー、トマト、キュウリなどで寄生が見られるが、夏季以降には、主要作物ではほとんど見かけない。



図6 モモアカアブラムシ有翅虫(タネツケバナ)

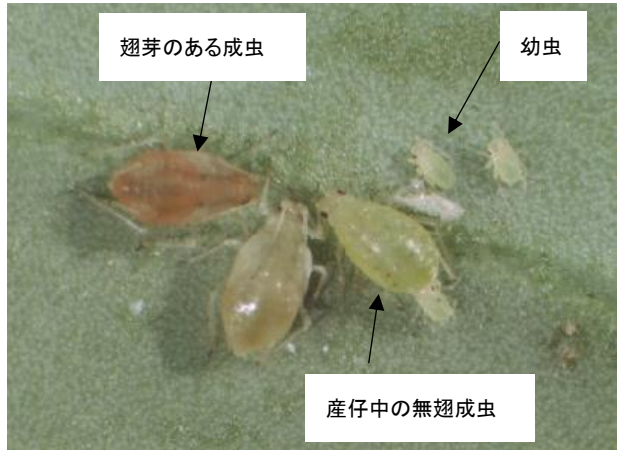


図7 モモアカアブラムシ成虫と幼虫



図8 シュンギクでの寄生状況

#### (2)形態及び生態、被害の様子

有翅胎生雌虫は体長約 1.9mm、頭部と腹部は黒色で腹部背面に大型の斑紋がある。無翅胎生雌虫は体長約 1.8~2.0mm、体色は白色、黄色、黄緑色、赤褐色と変異に富む。一次寄主はモモやスモモで、芽の付近で卵越



冬し、2月中旬以降に孵化する。ワタアブラムシと同様に寄主範囲が広いことから、ウイルス病の媒介者として注意しなければならない種であり、有機リン剤や合成ピレスロイド剤に対する抵抗性が発達していることが知られている。被害はワタアブラムシと同様に吸汁による生育不良やススの発生であるが、ハクサイやダイコンなどでは多発すると葉が枯れることがある。

### (3)防除対策

露地作物での発生が多く、化学的防除(薬剤防除)が主体になる。薬剤感受性の低下が懸念されるので、防除薬剤散布後、数日おいて効果確認をおこない、効果が見られない場合には系統の異なる薬剤を選択する。

## ○ジャガイモヒゲナガアブラムシ *Aulacorthum solani* (Kaltenbach)

### (1)本県での発生状況

本県ではトマトなどナス科野菜で定植後から寄生が確認されるが、寄生程度が高まり被害が発生する場合はほとんど見られない。

### (2)形態及び生態、被害の様子

寄主範囲は広く、ナス科野菜の他、キュウリやダイズ、イチゴなどにも寄生する。また、外見が酷似するチューリップヒゲナガアブラムシも同じく広食性で、どちらも植物ウイルス病の媒介者として注意しなければならない種である。

寒地ではギシギシやレッドクローバーなどで卵越冬すると言われているが、関東地方以西では野菜や野草で胎生雌虫のまま越冬することが多い。本県での越冬態については不明である。無翅胎生雌虫は体長約 3mm で黄緑色ないし淡緑色で光沢がある。触角が体長よりも長い。



図9 ジャガイモヒゲナガアブラムシ成虫

## ○ダイコンアブラムシ *Brevicoryne brassicae* (Linnaeus)

### (1)本県での発生状況

本県ではキャベツ、ブロッコリーなどアブラナ科植物で寄生が見られる。一般に春期多発型であり、本県の春キャベツでは5月頃に多く見られる。下葉から中位葉に発生が多く、葉裏にコロニーを作り、寄生密度が高くなると葉が縮れることがある。

### (2)形態及び生態、被害の様子

1年を通じてアブラナ科植物に寄生し、卵または無翅胎生雌虫で越冬することが知られている。無翅胎生雌虫の体長は2.2~2.5mmで、体色は暗緑色、体全体が白粉で覆われる。有翅胎生雌虫の体長は約2.1mm、灰緑色

で腹部背面に暗褐色の横帯紋と側面に斑紋がある。

成虫や幼虫が吸汁加害し、多発生すると排泄物によりススが生じ、葉物野菜では商品価値を下げる。新芽や新葉に寄生すると、葉の奇形や萎縮が生じる。



図10 ダイコンアブラムシのコロニー  
(キャベツの加害状況)

### (3)防除対策

本種はアブラナ科植物のみに寄生するため、ほ場周囲のアブラナ科の作物残渣や雑草の除去など、ほ場管理の徹底が重要となる。また、べた掛け資材を用いた被覆栽培を行うと初期生育が阻害されない。

ブロッコリーやキャベツなどアブラナ科作物は露地栽培が多いため、化学的防除(薬剤散布)が主体となる。

## ○ネギアブラムシ *Neotoxoptera formosana* (Takahashi)

### (1)本県での発生状況

ネギ、ニラなどのネギ類に群がって寄生し、大発生すると生育を阻害する。本県の秋冬ネギでは6～7月頃と11月頃に多く発生し、夏期の発生は少ない。

### (2)形態及び生態、被害の様子

無翅胎生雌虫の体長は 1.8～2mm、黒色～黒褐色で光沢がある。触角は体長よりも長い。生活史は不明な点が多い。ネギ、タマネギ、ニラに寄生するアブラムシ類は本種が主要発生種なので、体色や形状に大きな違いが無ければ本種と考えて良い。



図11 ネギアブラムシ成虫

### (3)防除対策

ネギ類は露地栽培であるため、化学的防除(薬剤散布)が主体となる。アブラムシ対象の薬剤防除を行っていれば、ほとんど問題になることはない。

### ○マメアブラムシ *Aphis craccivora* (Koch)

#### (1)本県での発生状況

インゲンやエンドウなどマメ科作物の茎の先端に寄生している。周年、マメ科の雑草や野菜で見られるが、春と秋に発生が多く、特に春季に多発する。

#### (2)形態及び生態、被害の様子

無翅雌虫の体長は 1.6~2.1mm、有翅成虫及び無翅成虫は黒く光沢がある。幼虫は黒のほか赤紫や黄褐色を帯びる個体もある。芽や葉、花、茎など各部でびっしりと盛り上がるようなコロニーを形成する。雑草ではカラスノエンドウやスズメノエンドウの新芽で大発生する。

成虫及び幼虫の吸汁加害により生育を抑制する。また、排せつ物による汚れやススにより、商品価値を落とす。



図12 マメアブラムシのコロニー  
(カラスノエンドウ)

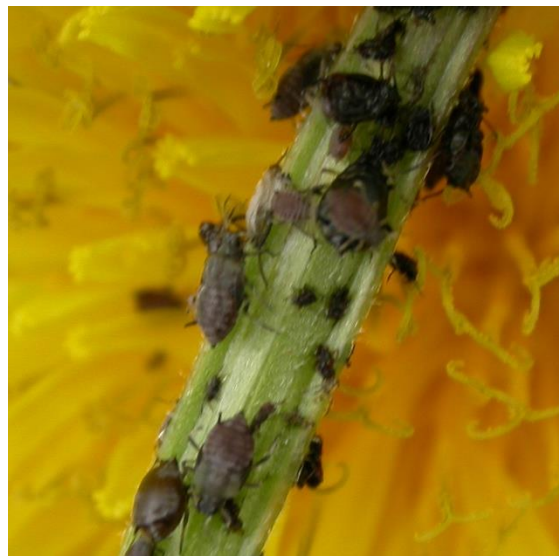


図13 マメアブラムシの成虫及び幼虫  
(カラスノエンドウ、背景はタンポポ)

### (3)防除対策

本県のマメ類は露地栽培が多いため、化学的防除(薬剤散布)が主体となる。アブラムシ対象の薬剤防除を行っていれば、ほとんど問題になることはない。